

というのは、そこの相互愛のスフェアを知覚する時、すぐさま、恐れと身震いに襲われ、そしてその時、靈たちの世界の中で、ある者は池に向かつて、ある者はゲヘナに向かつて、ある者は何らかのある地獄の中へ、投げ落とされるように見える。

一七 [一一三三] 二度か三度、主の神的な慈悲から、私に主への普遍的な賛美を聞いているかのような天界が開かれた、それは、多くの社会が、一緒にまた一つの心で、しかしそれでもどんな社会もそれ 자체の区別された情愛と観念によつて主を賛美したようなものであつた。聞かれる声には、その末端がないかのような、宇宙を見る時の視覚のような、これほどに果てしなく遠くまた広く聞かれる天界の声であつた。またこのことが最内部のうれしさと最内部の幸福と一緒にであつた。

さらにまた、主の賛美が、時々、心の内側を流れ下り、感動させる光線の放射のように知覚された。この賛美は「彼らが」静けさと平和の状態の中にいる時に生じる、なぜなら、その時、彼らの最内部のうれしさから、そして幸福そのものからその賛美が流れ出るからである。

* * * * *

第二部 世の終わりと最後の審判

(一) 「マタイ福音書」二四・三一八の解説

一一四

— [三三五三] 大部分の人間は、最後の審判がやつて来るとき、世の中に見られるすべてのものが滅ぼされる、すなわち、地が焼き尽くされ、太陽と月が消滅し、星が消え、またその後、新しい天と新しい地が起こると信じています。「彼らは」その見解をこのようなものが記録されている預言の啓示から受け入れています。しかし、事実が異なつていたことは、「最後の審判」について前に示されたことから明らかにすることができます(九〇〇、九三一、一八五〇、二二一七一二三三[一一一七]番)。ここから、「最後の審判」は、一つの国民のものとの教会の終わり、そして他の国民のものとのその始まり以外の他のものではないことが明らかです。その時、存在するようになるその終わりとその始まりは、もはや主の承認が何もない時、または同じことですが、何も信仰がない時です。何も仁愛がないとき、何も承認が、すなわち、何も信仰がありません、なぜなら、信仰は仁愛の中にいる者のもと以外に決してありえないからです。その時、教会の終わりと他のものへ移ることは、それらを主^{*}自身がその最後の日について、すなわち、世代の完了(世の終わり)について、「福音書」で、すなわち、「マタイ福音書」第二十四章、「マルコ福音書」第三〇章

十三章、「ルカ福音書」第二十一章で教え、予言されたそれらのすべてからはつきりと明らかです。しかし、それらは内意である鍵がなくては、だれからも把握されることができないので、それらをそこにあるものから順次、説明することができます。さて、ここで最初に、「マタイ福音書」のそれらは——

〔2〕弟子たちはイエスに近づいて、「私たちに言つてください。いつそれが起ころか、あなたの来るることと世代の完了(世の終わり)のしるしが何か」と言つた。イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、だれかに惑わされないよう気をつけなさい。というのは、多くの者が、『私がキリストである』と言つて、わたしの名前にやつて来て、多くの者を惑わすからです。あなたがたは戦争のことを、また戦争のうわさを聞くでしょうが、あなたがたは、「心を」乱されないように気をつけなさい。というのは、「これら」すべてのことが起ころからです、しかし、まだ終わりではありません。なぜなら、国民は国民に対して、また王国は王国に対して起き上がり、いろいろな場所に飢饉・疫病・地震(地の動き)があるからです。けれども、これらのすべてのことは苦痛の始まりです」(二四・三一~八)。

文字どおりの意味の中にとどまる者は、これらやその章の中に続いているものが、エルサレムの破壊とユダヤ民族が追い散らされることについて言われたのか、あるいは「最後の審判」と呼ばれる日々の終わりについて言われたのか、知ることができません。しかし、内意の中にはいる者は、

ここに教会の終わりが扱われていること、その終わりが、ここにまた他のところに主の来臨と世代の完了(世の終わり)と呼ばれているものであることをはつきりと見ます——またその「教会の」終わりが意味されるので、それらのすべてのものは教会に属すようなものを意味する、と知ることができます。けれども、内意で何が意味されるかは、個々のものから明らかにされます——例えば、「多くの者が『私がキリストである』と言つて、わたしの名前にやつて来る」は、そこでの「名前」は名前を意味せず、「キリスト」もキリストを意味しないで、「名前」は主が礼拝されるもの(手段)を意味します(二七二四、三〇〇六番)。また「キリスト」は真理そのものを意味します(三〇〇九、三〇一〇番)。「これは信仰に属すものである」、すなわち、「これは真理である」と言う者がやつて來ることもそうであり、実際には信仰に属すものも真理ではなく、虚偽です——「戦争のことを、また戦争のうわさを聞く」は、真理について論争と争いがあることであり、それが靈的な意味での戦争です——「国民は国民に対して、また王国は王国に対して起き上がる」は、悪は悪、虚偽は虚偽と争うことを意味します。「国民」は善です、しかし、正反対の意味では悪です(二二五九、二二六〇、一四一六、一八四九番)、また「王国」は真理です、しかし、正反対の意味では虚偽です(一六七二、二五四七番参照)——「いろいろな場所に飢饉・疫病・地震がある」は、もはや善と真理の知識が何もないことです、そしてそのように教会の状態が変えられること、それが「地震」です。